

二次元ぷち文庫

劍姫英雄伝

セイレン




表紙イラスト：ヨシカ  
岩重十郎太

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『剣姫英雄伝セイレン』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



劍姫英雄伝

# セイレン

岩重十郎太  
表紙 / ヨシカ

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

---

## イノ＝セイレン

正義感に富んだ大陸一の戦士。魔王復活に際して敢然と戦いに立ち上がり勝利した英雄。

## ギーレン

悪魔司祭。人間たちを裏切り魔王に加担した醜き男。

激しい手応えとともに大剣が肉体を貫通する。

ビキニアーマーの肉体ごと浴びせた剣に殺気を注ぎ、魔王の命を削り取る。

闘いの行方は定まった。魔王は敗北して人間界征服の野望ごと消滅する。正義を信じて旅立った女戦士は勝利の裡に帰還する。

だが、魔王も只では滅びはしない。暗黒の冥王は憎き女戦士の耳元で何事か囁き出す。

それが死の間際に吐き出される、恐るべき呪詛であると知っていた。

それでも貫く大剣を握る手の力は緩めない。

激しい魔法の雨下を潜り抜けて遂に掴んだ唯一の好機。道連れにされようとも魔王を滅ぼさねばならないのだ。

殷々と続く呪詛が突如途絶える。魔王の肉体からぷつ、と力が失われ、漆黒の肉体がサラサラと掻き消えていく。

一瞬、勝利の実感。しかし感慨に耽る間はなかった。魔王城が脆くも崩れ始めていたからだ。

大陸に夏が訪れつつあった頃。一人の女性が斯くして世界を救った。

あらゆる王国の軍隊を破った魔王軍とその王を砕いたのは、冒険者ギルドを義憤に駆られて飛び出した手練の戦士だった。

イノIIセイレン、二十五歳。ギルドで知らぬ者なき使い手である。

「ふ、……！」

崩壊した魔王城のほitori。人里離れた森の中。女戦士イノIIセイレンは中腰のまま息を整えた。

魔王滅びたいま、魔王軍もまた滅び、もう敵はいない。

それでも鞘に収めた大剣に手をかけたのは、コチラを窺う気配のせいだ。

「……誰？」

問いに応じてガサガサと出てくる男。

その顔を見て、セイレンは鋭く大剣を払い抜いた。

「ま、待て！ 待ちなよ！」

それは無理。疲労を忘れて地を駆ける。

この男は許し難い。欲望に駆られて人間を裏切り魔王に与した闇宰相、悪魔司祭ギールンだけは！

「待って！ 頼む！ アンタの解呪をしてやりたいんだよお!!」

最後の言葉があとコンマ一秒遅ければ、頭と胴は呆気なくオサラバしていただろう。

大剣の刃は紙一重、首筋に及ばず止まった。

「へ、へへ、た、助かった……」

目の前、小便さえ漏らしそうに、もとより醜い顔を更に醜く呆けさせている。

「さ、流石は魔王軍を破った火炎斬。確かに火が見えたよ」

余りに鋭い剣筋ゆえか、斬撃を浴びせられる敵兵は皆、セイレンの大剣に炎を見るという。そこから誰ともなくセイレンの剣筋は火炎斬と謳われる様になった。

もともと魔王調伏の旅の末、謳い上げられているのはなにも火炎斬のみではない。

百七十五センチの体躯と健康的な美肌。

大きな瞳と冷静な表情。時折見せる優しげな笑み。

落ち着いた高くも低くもない美声と、凜然たる佇まい。

ワインレッドで塗装されたビキニアーマーはイエローで鮮やかに縁取りされている。

その露出は大胆といってもよいくらいだが、敵も味方も、九十五は優にあらう双乳や、キユツと引き締まった華麗なヒップすら正視することはない。敵は恐怖から、味方は敬意から、その様な劣情を差し挟む余地がないのだった。

「……解呪、とは？」

全く対照的に卑屈で陰湿な表情と、無様な肥満腹、低めというべき身長。

魔王に仕えていたときのまま、紫紺の禍々しい悪魔司祭服を身に纏っている。

ギーレンは問われると一層卑屈に口を歪めた。

「いや、アンタ様の浴びた呪詛で」

決戦を隠れて見ていた愚者は親玉の敗北で一人残されたが、途方には暮れていなかった。新たな取引とおもねりの対手をすでに選んでいたのだ。

「アレは放って置くとアンタ様を狂戦士にしちまう」

「おっと、自決もダメで。今度は死霊戦士になっちまうんでさ」

「わかりますでしょ？ 解呪しない限り今度はアンタ様が人間界の厄災になる訳で」

「アンタ様の戦闘力じゃどれだけの被害が出るものか？」

急ぎ切って捲し立てた悪魔司祭が一息ついた。セイレンがやっと突きつけた大剣を鞘に収めたからだ。

（……自決も許さないと。魔王め、抜け目なしという訳か）

大陸の安寧の為ならば自決など容易い。しかしそれは許されない。となれば解決策は？  
ギーレンが醜い顔をニヤニヤさせている。

「どんな取引を望む？」

無然とした面持ちで女戦士は問うた。男の目が輝く。

「流石は話が早い。要は拙僧が社会復帰するのを手助けしてくれれば、それで」

（……ああ、成る程）

「拙僧は裏切りではなく、魔王の懐に飛び込んだスパイ。決戦ではアンタをナイスフオロ



「！ 如何いかがで？」

斬殺の衝動を封じて頷く。それは解呪の後でも遅くはない。

「分かりやあいいい！ それじゃ友情の証に一つ目の解呪魔法をかけてやろう！」  
俄に不快を増した言い様も、受け流す。

「魔法の通りがいい様に、リラックスして。何も考えずに」

「ほら、もつと。身を楽にして。まだ硬いなあ！」

散々リラックスを強要した末、魔法が発動される。

と、脳が一瞬クラリと揺らぐ、嫌な感覚。

「貴様……、もしも謀ったら」

「あはは、斬れば？ アンタならいつでもできら  
くるりと悪魔司祭が背中を向ける。

「……もつとも、もうアンタは術中だがね」

か細く呟いた声は、セイレンの耳へは届かない。

その表情は険悪に笑っていた。

街道に出ると、目指す場所はもう間もなかった。

魔王城の膝元にもかかわならず、付近にはセイレンの属するギルドが砦を築いて頑張つて

いる。

もう周辺に、かつての様な殺気と獣気はない。魔王軍は滅び、ここにも人々の往来が戻るだろう。

人間が造り上げたものへの愛着を覚えて、セイレンはふと立ち止まる。遠方に砦が見えた。「おお、もう直ぐか。懐かしいぞ、人間界」

本気かどうか、ギーレンが突拍子もなく言い募る。

男は袂をごそごそと探って、不意に女戦士に何物かを突きつけた。

「じゃ、そろそろコイツを着けてもらおうかな？」

「……？」

じつと見る。それは細く茶色い革ベルトだった。両端に鉤が施されている。

(なんだ、これは?)

用途の想像がつかない。旅に用いたことはない。

だがぶら下げられた革ベルトの先に窺える悪魔司祭の表情が、陰惨な予感を与えてくれた。

「……必要ない」

短く拒絶する。当然の選択。しかしギーレンは下から突き上げる感じで再度突きつけてきた。

「まあそう言いなさんな。何せ拙僧など砦に立ち入れば一言喋ることもままならず斬り捨てられちまう。だがコレをアンタが着けてくれりゃ、拙僧の睦まじさも一目で分かるだろ。……さあ、早く」

言いながら中腰の姿勢をとる様に仕草で伝えられて、困惑する。

こんなベルトなど必要ない。自明の理だ。

そもそも悪魔司祭であるギーレンと、なぜ必要以上に仲睦まじく見せねばならないのか？

なのに、セイレンはそつと姿勢を中腰へ直していた。

「……それは？」

「鼻フックだよ」

明快に言われて密かに驚く。鉤の一方が戦士の鉄兜の下端に嵌められる。

もう一度拒絶しようとして、頭がクラリと揺らいだ。

まるで拒絶の意思の固まりを妨害する感じ。

「やはり先程の魔法……」

ジロリと睨む。

「大丈夫、変なのじゃないよ。強い邪念を前にとたじろぐ様になってもらっただけさ」ニタリと笑われて、もう一言。

「あ、……ッ」

女戦士の腋窪だ。

細長く晒された腋の窪みと、髪と、ポツポツ残る黒点とを、男の視界一杯に収められてしまった。

（そんなところを、見られるなんて）

凝視されて、ゾクゾク震える。

（それに、嗅がれてる!?!）

男の鼻先が、蠢いている。

汗でドロドロの無防備な窪みに鼻先を突っ込まれ、恥ずべき腋臭を嗅がれている。

「どうだい、アンタ」

不意に男の頭が後ろに引かれると、ガタイなど意味を成さずに小太りギーレンに操られ、一歩下がる。

「あんたらの英雄は、女どころか牝だろう?」

「エロい匂いを振り撒いて」

「エロいポーズを見せつけて」

「コレが盛りのついた牝じゃなくてなんなんだ!?!」

（……クズめ……!）



声なく罵りながら、セイレンは身体の震えに戸惑わされる。

罵りほど、怒りは湧かない。

睨みつけるが、憎悪は沸点に達しない。

それよりも困惑が強かった。

視線に晒されている。値踏みされている。

男たちの目から尊崇の光はとうに後退し、眼前の現実を見据えていた。

女戦士の美貌はエロい豚顔と化して、紅潮している。

女戦士の美肢体はエロいボディそのものにぬめり、光沢し、美臭さえ放っている。

一人、二人、男どもが立ち上がった。

猥雑な牝臭を味わおうと、鼻を蠢かせながら、誰もが女戦士へ向けて一步を踏み出す。

「……来るな……！」

命ずる。

だが凜とした声ならともかく、豚声では幾らの威厳も存在し得ない。

「来るな、来たら……ッ！」

四人、五人、わらわらと寄ってくる。

誰一人耳を貸さない。

革ズボンの前を勃起させて、浮き足立って近付いて来る。

(ああ、来たら、嗅がれてしまう、私の匂い……!!)

男どもが零距离に寄り、忽ちセイレンの眼前に鈴なりになって、目を細め、鼻を動かす。クンクンクンクン、大男どもが恥ずかしげもなく音をさせて、ポーピングしたままの無防備な肢体を隈なく嗅ぐ。

決して触れず。

決して逃さず。

腋臭に六人も七人も群がっている。

鉄兜から流れ出た長髪にも群がって、汗臭が嗅がれている。

双乳の甘い香りも、プレートショーツに護られたヒップから漏れ出る香りも、匂いらしき匂いに悉く群がってくる。

「ハハ、お前さんはアソコがお好みか」

群集と化した冒険者たちに紛れて、悪魔司祭は足許にいた。

卑怯者はめざとく、一人の男に声をかけている。

「さあセイレン。片足を上げるんだ」

声は耳に浸透して、前に進めていた足をふと上げる。

すると手早く左足のブーツプレートが外される。

包帯状の帯も解かれて、露になったのは素足を包むショートストッキング。

黒く薄くふくらはぎから脚先までを包んだ極薄の布だ。

「ホレ、遠慮なくどうぞ?」

悪魔司祭の煽りのままに、件の冒険者が跪く。

何の躊躇いもなく、男は挑発的に差し出された女戦士の爪先に鼻先を捧げた。

(……あ、そんなところまで……)

プレートブーツの中で蒸れきった爪先だ。酷い匂いがしている筈だった。

だが実際には、淫靡な女戦士の体臭ならば、それすらもフェロモン臭と化してしまうのだ。全身、まるで実を付けたかの様に男たちをぶら下げて、セイレンは匂いを貪らせていた。臭い筈なのに。

有難そうに。

(あんなに勃起して……!)

密集の熱気の中、ゾクリ、背筋に寒気が駆け抜け、痺れとなって沈殿し、背骨をくすぐる。無言の灼熱が、セイレンの身体を蝕んでいく。

無言の興奮が、一人の女を中心に高揚していく。

逃れ難い鎖が強固さを増し、雁字搦がんじがらめに召捕られる。

そしてその手綱を握っているのは……?!

「ふふ、いいねえセイレンは。そろそろハメたくなってきたよ」

えげつない猥雑音。

抗い難い満足感と渴望感が溢れ出し、理性が淫戯への敗北を予感して、せめて冒険者どもを威圧しようと試みる。

「キサマら、見るなあ！」

だが、それは無理な注文だ。

あの女戦士がビキニアーマーのまま、汗も唾液も、淫液さえ撒き散らしてヒップを躍らせているのだ。

眼下に悪魔司祭の醜顔と、いやらしく見上げてくる視線。

四周からは屈強な男たちの視姦視線が隈なく浴びせられて、逃げ場などない。

そんな群衆の中から。

「(変態め)」

ボソリ、聞こえた。

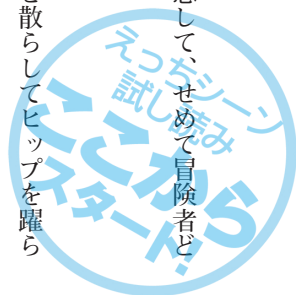
「(清潔振りやがってた癖に!)」

「(あんなアーマー着けてる訳だ! この露出狂め!)」

ボソボソと、四周から聞こえてくる。

(……違う! 私は……!)

否定したくてぼやける瞳で人壁を見る。





「!?」

ドキ、とした。

誰もがガチガチの勃起を取り出して、右手を添え、しごいている。

女戦士を面罵する言葉を呪詛の様に呟きながら、淫堕な英雄に罰を与えるかの様に。

「……あ……」

セイレンは瞬く様な抵抗心がふと消え去っていくのを感じた。

誰もが発情して、この一室を猥雑に蕩けさせ、濃密な淫臭と混ざりあい、高揚している。

ここは最早、こういう場なのだ。爛れた気配も、膿んだ脳も、この場に於いては狂気ではない。

冒険者たちと女戦士の間に奇妙な予定調和が成立して、不意、セイレンはこの性交を肯定してしまった。

「んあ、ふ！ んん！」

白光が瞬いた。

瞬間、おそらく脳の籬が外れた。悪魔司祭の両肩をガツチリと掴む。爪先に力を籠める。

「く、んんふ！」

ガクガク、激しくヒップを揺らすだけで、肉体を貫く絶対的な快楽が溢れ出す。

「あひ、チンポ、すごい！」

ゾワリ、脊髓が痺れて拒絶など問題にならない。

「見られながらハメるの、キモチいい！」

嬌声と肉音が連続して、感覚を埋めていく。

ヌポヌポと粘音が異なる階調から脳を襲い、発泡して、淫乱に染めていく。

「ふお、お、イッちやいそお……！」

激しい衝動が、込み上げてくる。男どもの視線を感じながら、巨大な塊が浮上してくる。閃光が脳に弾け出して、頭の中を単色に染め上げていく。

感覚が浮ついて、心がどうしようもなくはしやぎ始めて、衝動のまま子供の様に喚いた。

「コンナヤツのチンポでえ！」

「オトコどもに見られてえ！」

「イク！ イッちやうう……！」

肉体の中枢が失われ、ガクリ、首が後ろに崩れる。

ビクビク、身体中が絶頂痙攣に襲われる。

「あひ、イッてる、イッちやつてるうう！」

ズッポリと勃起ペニスを咥え込んだまま、

「んおお、んう！ 中でチンポびくびくしてるう！」

ビキニトップを悪魔司祭の醜顔に押しつけて力を籠め、射精を促す様に全身をギュッと

収縮させる。

忽ち、淫孔の奥深くで勃起が激しく脈動し、鈴口が弾けた。

ビュピュク！ ビュ、ビュク……!!

「んおほ！ いま、いま出されてる！ 発射されてるうう！」

醜い唸りと、男女の淫臭とが、一室を満たす。

「ス、スゴお、中で、ビクビク、こんなヤツの臭いのがあ……！」

喚きながら潰してしまいそうなくらいに悪魔司祭を抱き締めて、射精勃起を食い締める。ビクビク強烈な絶頂感覚が美肢体をざわめかせて、それからピクリ、ピクリ、斜陽の余韻を嘔み締める様に味わう。

(……スゴ、……い……)

ふわふわとした感覚に満たされながら、それだけ、呟いた。

墮落した快楽に溺れていく様を冒険者たちに一部始終を見せつけながら、愉悦の中に埋没していく。

そこには最早、英雄といわれた女戦士の姿はなく、一人の女がいるだけだ。

「……う、……ふ、あ」

(……あ、落ちる……?)

強烈な絶頂感覚を食った後、気だるく甘い疲労感が肉体を支配して、ズルリ、力が抜ける。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**